

Investigation of Factors Affecting  
Self-Competence Formation in Adolescents:  
Relevance to With Parent-Child Relationships and  
Internal Working Models in Childhood

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増南, 太志, 尾形, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1550">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1550</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討

— 幼少期の親子関係・内的作業モデルとの関連性から —

## Investigation of Factors Affecting Self-Competence Formation in Adolescents

Relevance to With Parent-Child Relationships and Internal Working Models in Childhood

増南太志・尾形和男

MASUNAMI, Taiji OGATA, Kazuo

青年期の自己有能感形成要因について、幼少期の親子関係イメージと内的作業モデルとの関連性から調査用紙に基づいて、「親子関係」→「内的作業モデル」→「自己有能感」、「親子関係」→「自己有能感」のモデルの検証を行った。調査対象は大学生473名（1年生88名、2年生144名、3年生219名、4年生22名、平均年齢は19.13歳）。分析の結果、父親の場合「安定した内的作業モデル」→「自尊感情」の有意な正のパスが確認されたのみである。母親の場合には、「安定した親子関係」→「安定した内的作業モデル」→「自尊感情」と「他者軽視」へ有意な正のパスが確認された。「依存的な母子関係」→「不安定な内的作業モデル」→「自尊感情」への有意なパスが確認された。さらには「安定した母子関係」→「他者軽視」「自尊感情」、「依存的母子関係」→「他者軽視」と有意なパスが確認され母親について仮説が確認された。いずれも、安定した母子関係はプラスの効果をもたらすことが示された。

### 問題と目的

対人行動の在り方を左右する一要因として、自己有能感があげられる。自己有能感とは自己の内側に潜む自尊感情と他者軽視とのバランスの在り方を示すものであり（速水・水野・高木, 2003）、自己と他者についての両価値観の在り方に基づいて行動が左右されるとする考え方である。自己有能感の在り方は対人関係の良し悪しを左右するものであり、社会的行動を促進するためには不可欠のものである。

では、自己有能感はどのように形成されるのであろうか。自己有能感の形成に関しているいろいろな先行研究があるが、自己有能感の形成にあたり基礎的な時期と考えられる幼少期の子育てとの関連性に焦点を当てたものが比較的多い。例えば尾形・増南（2019）は青年の自己有能感と児童期のつらい出来事やしつけへの親の関わりとの関連性を探り、自己有能感の4類型の中の「自尊型」の学生は父親・母親から「褒める」対応を多く受けており、「全能型」では「けなす」対応のように親から認めてもらうなどの受容的な態度が欠如してい

キーワード：自己有能感、親子関係、内的作業モデル

Keywords : self-competence, parent-child relationships, internal working models

る場合に関連していることを指摘している。また、尾形・増南（2021）は自己有能感の構成要素の「自尊感情」「他者軽視」と両親による中学校までの養育態度（PBI）との関連性を検討し、愛情や共感のあることと同時に過保護にならずに自律を促す養育態度が自尊感情を高めるために重要であること、また「他者軽視」については父親の冷淡で干渉の多い場合に高められることが示されている。同様に自己有能感の構成要素である自尊感情に焦点を当てた研究も多くみられ、大学生を対象とした調査から、現在に至るまでの親から受けた期待が大きいと感じる場合ほど自尊感情が高いことも指摘されている（春日・宇都宮，2011）。

これら一連の研究は幼少期の親子関係が自己有能感に何らかの影響をもたらすことを指摘しているのであるが、幼少期の親子関係の中に潜む重要な要素として、愛着関係に注目し、それと各精神的機能の発達との関連性についての報告がなされている。例えば、河合・福井（2005）は、青年期の内的作業モデル（Internal Working Model：IWM）と心理的健康との関連について調査分析を加え、男女共に安定得点はポジティブな方向で関連していることを指摘している。但し性差があり、男子では安定得点が自尊感情に影響が見られないものの女子では見られることも指摘している。また、上淵・山田・藤井・利根川（2011）はIWMと他者軽視型、自尊心との関連性について大学生への調査から検討を加え、回避は自尊心に負の影響を及ぼし、不安は他者軽視に正の影響、自尊心に負の影響をもたらすことを示した。つまり、他者への回避が低くなればなるほど自尊心が高くなり、自分についての不安が低くなればなるほど他者軽視が低

くなり自尊心が高まるということを示した。また、村上・櫻井（2012）は児童期の複数のアタッチメント対象に対するIWMが青年期の自尊心に及ぼす影響について検討を加え、児童期における複数のアタッチメント対象に対するIWMは、一般的に統合されたものとして認知されており、それは青年期の自尊心に対して大きくはないものの影響を及ぼしていることが確認されたとしている。森下・三原（2015）は親しい人との愛着関係と自己受容、対人不安との関係について分析を加えた。ここでは、IWMと自己受容について取り上げているが、自己受容を自尊感情に近い概念として扱っている。その結果、母親への愛着は自己受容を高めると同時に異性不安を高め、父への愛着は「不安定なIWM」を緩和しそれを介して自己受容を高めることを確認している。

以上の例のように、幼少期の親子関係の中に存在する基本的なメカニズムである愛着関係に焦点をあてて、その中で形成されるIWMを基盤として子どもの成長を捉える方法が使用されるようになっている。

また上記のIWMを基盤に置き子どもの自己有能感形成について検討を加える見方に関連して、愛着形成理論と自己有能感に関する理論間に共通点があることが指摘されている。まず愛着形成について次のことが指摘できる。アタッチメント形成の際に「自分は愛されるだけの価値がある」「他人は信頼できる存在である」とする2軸を基として両側面の配合に基づいて他人と自分についての見方が形成されていくことになる。この過程はIWMと呼ばれるものであり、Bowlby（1973）によれば、IWMは生後6ヶ月から5歳頃まで継続して形成されるとされる。しかも、幼少期に形成されたIWMは基本的には成人まで継続されて基本

形を維持するとされている。このような考えに基づいてBartholomew & Horowitz (1991) はBowlbyにより指摘された2軸（「自分は愛されるだけの価値がある」(見捨てられ不安), 「他人は信頼できる存在である」(親密性の回避)）を用いて、4領域にわたる分類を行っている。一方、自己有能感の構成要素である自尊感情と他者軽視の2軸についてはそれぞれ見捨てられ不安と親密性の回避に対応しているとされる。この両軸を基として自己有能感についても4類型形成されることとなる。丹羽・速水（2007）はこの点について残差分析を用いてIWMと自己有能感の類型同士の対応を検討し、IWMの4類型と有能感の4類型に一定の対応がみられたとしている。同様に島（2012）もアタッチメントのIWMと仮想的有能感の関連性を探り、アタッチメントスタイルと有能感スタイルが、自己の次元において相互に関連することを示している。これは自己有能感が幼少期のIWMと類似した強い関係

があることを示すものとも考えられる。しかも、子どもの発達の流れに沿った時系列に沿ってみると、幼少期に形成されたIWMはBowlbyの考えに基づいてみると成人にも継続されていくのであり、その結果として成人期のIWMの形成状況の一つとして自己有能感が派生するとも考えられる。したがって自己有能感の形成要因としてIWMを基本に置くことは、より現実的に幼少期の親子関係と青年期の自己有能感形成との因果関係を捉えるために有効な視点であると思われる。このような視点に基づき、本研究では自己有能感形成に及ぼす要因として幼少期の父親・母親との愛着関係を基本として位置づけ、次にそれがIWM形成に及ぼす影響、そしてIWMが自己有能感形成に及ぼす影響を探ることを目的とする。また、幼少期の親子関係が直接に自己有能感形成に及ぼす影響も併せて検討する。そのためにこれらの考え方に基づき、Figure 1 に示すモデルの検証を行うことを目的とする。

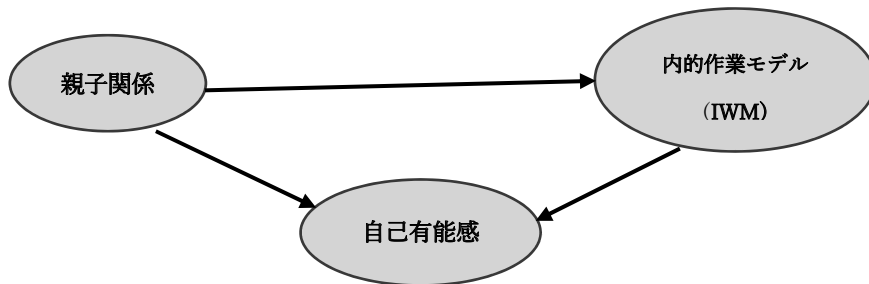


Figure 1 モデル図

## 方法

### 1. 調査対象

埼玉県のA大学の473名 [1年生88名、2年生144名、3年生219名、4年生22名]、平均年齢19.13歳を対象とした。

### 2. 調査用紙

(1) 父子関係イメージおよび母子関係イメージを測定する項目。酒井（2001）の「幼少期の母子関係に関する項目」に基づいて作成された尾形・舟橋（2016）の「幼少期の父子関係イメージを測定する質問紙」と「幼少

期の母子関係イメージを測定する質問紙」を用いた。

(2) 内的作業モデルの項目。森下・三原(2015)において使用された「安定した内的作業モデル」「不安定な内的作業モデル」を測定するための質問紙を用いた。

(3) 自尊感情を調べる10項目。Rosenberg(1965)による自尊感情を測定する質問紙の日本語版(山本・松井・山城, 1982)を用いた。

(4) 他者軽視を調べる11項目。速水・木野・高木(2004)が開発した仮想的有能感を測定する質問紙の改訂版(Hayamizu, Kino, Takagi & Tan, 2004)を用いた。この質問紙は他者軽視の測定に用いる。

(1)～(4)の質問紙は全て4段階評定であった。

### 3. 調査時期

2022年5月に、講義を通して調査の主旨と内容を説明し、協力を承諾してくれた学生に講義後、調査用紙を配布し、後に回収した。

### 4. 倫理的配慮

説明にあたり、研究の目的、個人情報の保護、個人的に見るものではなく全体の傾向を見るものであること、またデータ入力後はアンケート用紙はシュレッダーで処理すること、コンピューターに入力したデータは外部との接続が無いことなどを伝え、守秘義務に基づき迷惑をかけない旨説明を行った。

## 結果

### 1. 確認的因子分析および信頼性の確認

本研究で用いた項目について確認的因子分析を行った。データへのモデルのあてはまりの良さを判断する適合度指標には、 $\chi^2$ 値、

RMSEA、GFI、CFI、AICを用いた。これらの指標の基準については、小塩(2005)は、GFIが0.9以上、CFIが0.9以上を目安としている。また、山本・小野(2002)は、RMSEAが0.08以下であれば適合度が良いと判断している。 $\chi^2$ 値は、明確な基準はないものの小さい値であるほど良いとされる。AICは小さいほど良いモデルとされる。したがって、本研究においては、 $\chi^2$ 値が小さく、RMSEAが0.08以下、GFIが0.9以上、CFIが0.9以上、AICが小さい場合に、モデルとデータの適合が良いと判断した。なお、欠損値に対しては完全情報最尤推定法を用いた。

質問紙の信頼性の確認には $\alpha$ 係数を用いた。 $\alpha$ 係数の基準は0.70とした。

### (1) 父子関係イメージおよび

#### 母子関係イメージ

父子関係イメージは、安定した父子関係と依存的父子関係に分けられる。Table 1に父子関係イメージにおける因子ごとの項目を示した。確認的因子分析の結果、 $\chi^2(64) = 369.95$ 、RMSEA=0.14、GFI=0.95、CFI=0.77、AIC=7318.41であり、データへのあてはまりは不十分であった。修正指数に基づき、安定した父子関係の01と02、01と03、02と03、03と05、依存的父子関係の07と09、11と12、11と13、11と14、12と13、12と14、13と14の間に相間を仮定した。その結果、 $\chi^2(53) = 105.252$ 、RMSEA=0.06、GFI=0.99、CFI=0.96、AIC=7075.71であり、修正前のモデルに比べデータに適合しており、あてはまりも良好であった。また、 $\alpha$ 係数はいずれの因子においても0.7を超えており信頼性が確認された。

母子関係イメージについても、安定した母子関係と依存的母子関係に分けられる。

青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討

Table 1 父子関係イメージ

因子	no	設問	$\alpha$
安定した父子関係	1	私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。	0.86
	2	私が泣いていても、親は関心がなかった。	
	3	いつか見捨てられるのではないかと考えた。	
	4	私は親が好きだった。	
	5	助けてほしい時に、親は助けてくれないことがあった。	
	6	私はよく親に、褒められた。	
依存的父子関係	10	私は親が何をしても、それに関心がなかった。	0.74
	7	親と出かけるのが好きだった。	
	9	親と遊ぶのが楽しかった。	
	11	親がそばにいないと夜眠れなかった。	
	12	親戚の家に行っても、親がいなくて怖かった。	
	13	幼稚園(保育園)に行っても、親を思い出してずっと泣いていたことがあった。	
14	親が出かける時は、無理やりついでにこうとした。		

下線の項目は逆転項目

Table 2 母子関係イメージ

因子	no	設問	$\alpha$
安定した母子関係	1	私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。	0.85
	2	私が泣いていても、親は関心がなかった。	
	3	いつか見捨てられるのではないかと考えた。	
	4	私は親が好きだった。	
	5	助けてほしい時に、親は助けてくれないことがあった。	
	6	私はよく親に、褒められた。	
	7	親と出かけるのが好きだった。	
	8	私は親のそばは安心感があった。	
	9	親と遊ぶのが楽しかった。	
	10	私は親が何をしても、それに関心がなかった。	
依存的母子関係	11	11 親がそばにいないと夜眠れなかった。	0.76
	12	12 親戚の家に行っても、親がいなくて怖かった。	
	13	13 幼稚園(保育園)に行っても、親を思い出してずっと泣いていたことがあった。	
	14	14 親が出かける時は、無理やりついでにこうとした。	

下線の項目は逆転項目

Table 2に母子関係イメージにおける因子ごとの項目を示した。確認的因子分析の結果、 $\chi^2(76) = 353.74$ 、RMSEA=0.12、GFI=0.97、CFI=0.77、AIC=7480.63であり、データへのあてはまりは不十分であった。修正指数に基づき、安定した母子関係の01と02、01と03、01と05、01と06、02と03、02と10、07と08、07と09、08と09、08と10、依存的母子関係の13と14の間に相関を仮定した。その結果、 $\chi^2(65) = 99.88$ 、RMSEA=0.05、GFI=0.99、CFI=0.97、AIC=7248.77であり、修正前のモ

デルに比べデータに適合しており、あてはまりも良好であった。また、 $\alpha$ 係数はいずれの因子においても0.7を超えており信頼性が確認された。

(2) 内的作業モデルの項目

内的作業モデルの項目は、安定した内的作業モデル、不安定な内的作業モデルに分けられる。Table 3に因子ごとの項目を示した。確認的因子分析の結果、 $\chi^2(34) = 272.70$ 、RMSEA=0.17、GFI=0.97、CFI=0.83、



Table 3 内的作業モデルの項目

因子	no	設問	$\alpha$
安定した内的作業モデル	1	私はすぐに人と親しくなる方だ	0.87
	2	初めて会った人とでもうまくやっけていける自信がある	
	3	私は知り合いが得意やすい方だ	
	4	私は人に好かれやすい性質だと思う	
	5	たいていの人私のことを好いてくれていると思う	
不安定な内的作業モデル	6	時々友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	0.87
	7	人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	
	8	ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう	
	9	自分を信用できないことがよくある	
	10	あまり自分に自信が持てない方だ	

AIC=5583.38であり、データへのあてはまりは不十分であった。修正指数に基づき、安定した内的作業モデルの05と不安定な内的作業モデルの10を除くとともに、不安定な内的作業モデルの06と07、07と08の間に相間を仮定した。その結果、 $\chi^2(17) = 42.17$ 、RMSEA=0.08、GFI=0.99、CFI=0.97、AIC=4485.44であり、修正前のモデルに比べデータに適合しており、あてはまりも良好であった。また、 $\alpha$ 係数はいずれの因子においても0.7を超えており信頼性が確認された。

(2) 自尊感情および他者軽視

自尊感情の各項目と  $\alpha$  係数をTable 4に示

した。確認的因子分析の結果、 $\chi^2(35) = 160.61$ 、RMSEA=0.12、GFI=0.97、CFI=0.86、AIC=5503.21であり、データへのあてはまりは不十分であった。修正指数に基づき、自尊感情の01と02、01と10、02と05、04と05の間に相間を仮定した。その結果、 $\chi^2(31) = 66.51$ 、RMSEA=0.07、GFI=0.99、CFI=0.96、AIC=5417.11であり、修正前のモデルに比べデータに適合しており、あてはまりも良好であった。また、 $\alpha$ 係数はいずれの因子においても0.7を超えており信頼性が確認された。

次に、他者軽視の各項目と  $\alpha$  係数をTable 5に示した。確認的因子分析の結果、 $\chi^2(44) = 129.81$ 、RMSEA=0.09、GFI=0.97、CFI=0.91、

Table 4 自尊感情の項目

no	設問	$\alpha$
1	私は自分に対して肯定的である	0.85
2	私は、人並みには価値のある人間である	
3	私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい	
4	自分が全くダメな人間だと思うことがある	
5	私はいろいろな良い素質を持っている	
6	私は何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	
7	私は物事を人並みには、うまくやれる	
8	自分には、自慢できるところがあまりない	
9	私は自分のことを敗北者だと思うことがよくある	
10	私はだいたいにおいて、自分に満足している	

下線の項目は逆転項目

Table 5 他者軽視の項目

no	設問	$\alpha$
1	自分の周りには気のきかない人が多いと思う	
2	自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	
3	自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りには少ない	
4	他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる	
5	世の中には、常識のない人が多すぎる	
6	話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	0.88
7	知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	
8	世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	
9	他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	
10	今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	
11	他の人を見ていると「ダメな人だ」と思うことが多い	

AIC=5834.90であり、データへのあてはまりは不十分であった。修正指数に基づき、他者軽視の03と05、06と07、06と11、08と10の間に相間を仮定した。その結果、 $\chi^2(40) = 79.32$ 、RMSEA=0.06、GFI=0.98、CFI=0.96、AIC=5792.41であり、修正前のモデルに比べデータに適合しており、あてはまりも良好であった。また、 $\alpha$ 係数はいずれの因子においても0.7を超えており信頼性が確認された。

## 2. 共分散構造分析による仮説検証

父子関係イメージ（または母子関係イメージ）、内的作業モデル、自尊感情・他者軽視について、Figure 1の仮説モデルを検証した。

### (1) 父子関係イメージ

安定した父子関係・依存的父子関係、安定した内的作業モデル・不安定な内的作業モデル、自尊感情・他者軽視について共分散構造分析を行った。その結果、 $\chi^2(784) = 1244.57$ 、RMSEA=0.05、GFI=0.96、CFI=0.90、AIC=22589.48であり、本研究のモデルは、データに適合していた。モデルの図をFigure 2に示した。このモデルでは、有意なパスは、安定した内的作業モデルから自尊

感情へのパスのみであり ( $p < .001$ )、その他は、安定した内的作業モデルから他者軽視に対して有意傾向であった ( $p < .10$ )。

### (2) 母子関係イメージ

安定した母子関係・依存的母子関係、安定した内的作業モデル・不安定な内的作業モデル、自尊感情・他者軽視について共分散構造分析を行った。その結果、 $\chi^2(825) = 1269.54$ 、RMSEA=0.05、GFI=0.97、CFI=0.90、AIC=22747.50であり、本研究のモデルは、データに適合していた。モデルの図をFigure 3に示した。自尊感情への有意なパスは、安定した母子関係 ( $p < .05$ )、安定した内的作業モデル ( $p < .001$ )、不安定な内的作業モデル ( $p < .001$ ) であった。また、他者軽視への有意なパスは、安定した母子関係 ( $p < .01$ )、依存的母子関係 ( $p < .05$ )、安定した内的作業モデル ( $p < .01$ ) であった。さらに、安定した母子関係から安定した内的作業モデルへの有意なパス ( $p < .001$ )、安定した母子関係 ( $p < .01$ ) および依存的母子関係 ( $p < .05$ ) から不安定な内的作業モデルへの有意なパスが確認された。



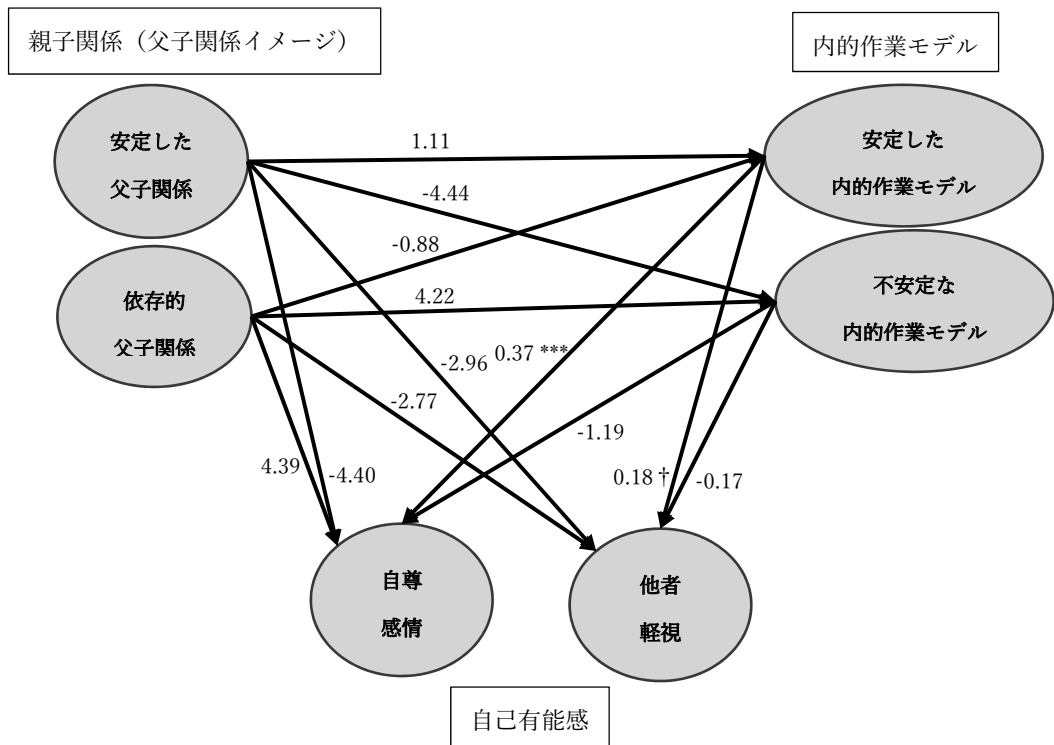


Figure 2 父子関係イメージ、内的作業モデル、自己有能感の関係モデル。

(各パスの数値は標準化推定値。† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

## 考察

本研究では、幼少期の親子関係、父親・母親との愛着関係による自己有能感形成への影響を探ることを目的とし、①「幼少期の親子関係」→「父親・母親との愛着形成」→「自己有能感への影響」、②「幼少期の親子関係」→「自己有能感」への影響を検討した。結果としては、父子関係と母子関係では影響の現れ方が大きく異なっていた。母子関係では、仮説どおりに、「母子関係」→「IWM」→「自己有能感」、「母子関係」→「自己有能感」の影響がみられたのに対し、父子関係では、「IWM」→「自己有能感」のみであった。

今回父親について有意なパスが確認されず、

全体としてモデル図に示す流れが検証されなかったといえる。これに関して、寺田・岩淵(2008)も幼少期の愛着不安と愛着回避の2側面から父親と母親の区別と被調査者の性差の視点を含めず両親と子どもとの間の愛着関係が子どもの自尊心に及ぼす影響を調べているが、幼少期の愛着関係から自尊心への有意なパスは確認されていない。この結果は、両親共に子どもとの間に形成される愛着関係が子どもの自尊心形成に関連性を有さないのか、あるいは母親、父親のいずれかがそのような関連性を有さないのか明らかではない。しかし、本研究の結果は父親の場合、直接的・間接的に自己有能感形成に影響力を持たないことが示され、安定した内的作業モデルから自尊感

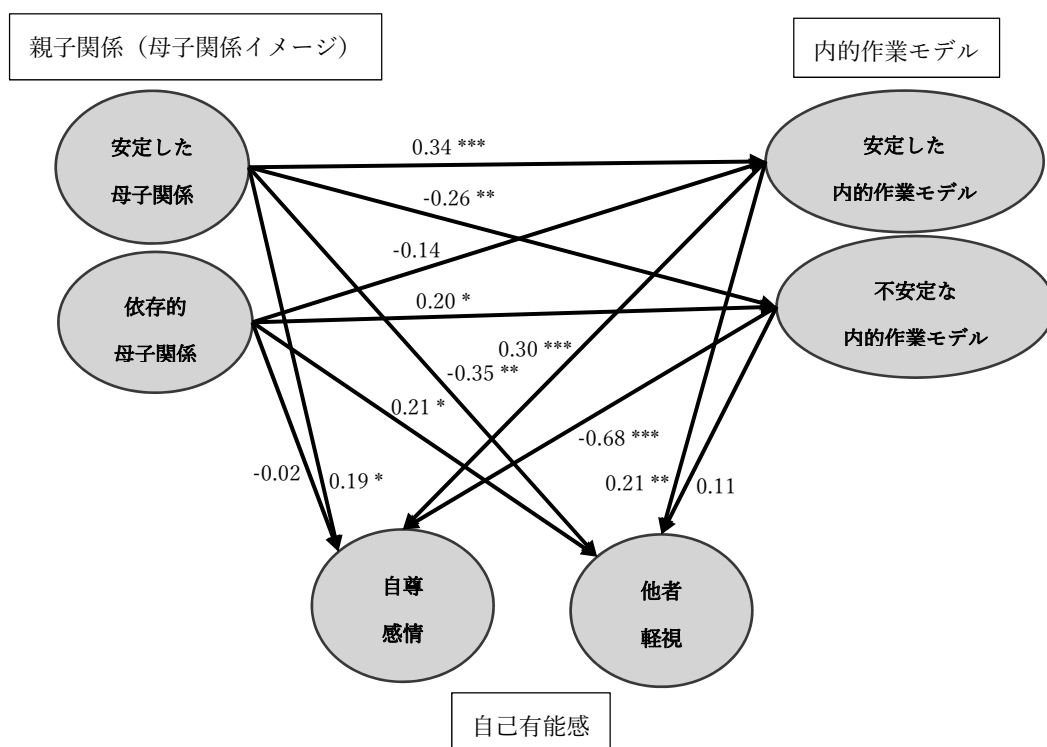


Figure 3 母子関係イメージ、内的作業モデル、自己有能感の関係モデル。

(各パスの数値は標準化推定値。† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

情形成に影響が見られたのみであった。この結果は幼少期の時期において父親と子どもの間に展開される親子関係のあり方そのもの、それに基づいて形成される愛着の強さや質などの諸要因が関わっているとも考えられる。

一方母親の場合には、「幼少期の親子関係」→「父親・母親との愛着形成」→「自己有能感」、という流れが確認され、母親との間に形成される愛着関係が直接的・間接的に自己有能感形成に影響をもたらしていると考えられる。直接的な影響として具体的には、安定した母子関係は自己有能感の自尊感情を高め他者軽視を低め、依存的な母子関係は他者軽視を高めている。また間接的な影響としては、安定した母子関係は安定した内的作業モデル

を強め、それが自尊感情と他者軽視を高める一方で不安定な内的作業モデルを弱め、それが自尊感情を高めている。依存的な母子関係については不安定な内的作業モデルを強め、それが自尊感情を低めていることが示されており、安定した母子関係は安定した内的作業モデルを介して自尊感情と他者軽視の両面に影響していることがわかる。

この結果は母子間に形成される愛着関係のあり方が父子間に形成される愛着と異なるからだと考えられる。

これに関して、尾形・舟橋 (2016) は幼少期の親子関係イメージ (安定的関係・依存的関係と高校生の対人関係との関連性について分析を加えたが、父親よりも母親の方がより

はっきりした繋がりがあるとしている。また、その要因として母親と父親と子どもとの間に形成される愛着関係のあり方は良好な夫婦間関係であるほど母親の精神的安定度が増し、そのことが父子関係以上に安定した良好な母子関係を形成するとしている。このように、親子関係のあり方を左右する夫婦関係のあり方も親子の愛着関係形成に関連しているといえる。また、愛着安定性には周りの大人の関わりのあるあり方、子どもの心を読み取る力（センシティブティ）が強く関わるとされ（成田, 2011）、正に父親と母親の関わり方の差異が結果として表れたとも考えられる。またこれと類似した概念として敏感性も指摘されている（Ainsworth et al., 1978）。親の子どもに対する敏感性が愛着関係を形成安定させる要因として指摘されているが、敏感性そのものは親の内省機能（reflective function）が重要なものであるとする考え（Fonagy et al., 2002）や、洞察性（insightfulness）が関わるとする立場（Oppenheim et al., 2004）、心を気遣う傾向（mind-mindedness）が重要であるとする考え（Meins et al., 2013）も指摘されている。このように、母親の場合子育てに関わる時間の長さに加え、夫婦関係のあり方によって親子関係の安定性が影響され、しかもセンシティブティあるいは敏感性については父親と異なる面もあると考えられ、このようなことが愛着関係形成に何らかの違いをもたらしているものとも考えられる。

その一方で、山田・藤井・上淵・利根川（2011）は一般他者への愛着尺度（ECR）を用いた分析から、親密性の回避から自尊心と他者軽視へ有意な正のパスを確認している。これらの結果は全て男女込みにして分析したものであるが、幼少期の親との間に形成された愛着

関係と自尊感情、他者軽視の関係に関する結果とは必ずしも一致していない面も見られる。

このことに関して、今後ともに父親母親別、子どもの性別、更には夫婦関係を基盤変数とした視点も含めてより具体的に検討を継続することが必要と考える。同時に、ECRによる測定と幼少期の愛着関係を基とした場合も必ずしも一致した結果が得られるとは限らず、測定方法についても改めて継続して検討する必要があると考える。

## 引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.S., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Oxford: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. 1991 Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of personality and social psychology*.
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss: Vol.2 Separation. New York: Basic Books.
- Fonagy, P., & Target, M. 1997. Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有感情の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 1-8.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5 (2), 127-135.
- 春日秀朗・宇都宮博 2011 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響－子どもの期待に対する反応様式に着目して－立命館人間学研究, 22, 45-55.

## 青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討

- 河合三奈子・福井義一 2005 青年期における内的作業モデルと心理的健康との関連 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 293.
- 上淵寿・山田琴乃・藤井勉・利根川明子 2011 愛着の内的作業モデルと他者軽視傾向、自尊心の関連 (I) - 顕在レベルでの検討 - 日本心理学会第75回大会発表論文集, 1003.
- Meins, E., Fernyhough, C., Arnott, B., Leekam, S.R., & de Rosnay, M. 2013 Mind-Mindedness and Theory of Mind: Mediating Roles of Language and Perspectival Symbolic Play. *Child Development*, 84 (5), 1777-1790.
- 森下正康・三原まどか 2015 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響:内的作業モデルと自己受容を媒介として 発達教育学研究:京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要, 9, 31-42.
- 村上達也・櫻井茂男 2012 児童期における複数のアタッチメント対象に対する内的作業モデルが青年期の自尊心に及ぼす影響 - 回顧法による検討 - 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1004.
- 成田朋子 2011 子どもの発達における家族の重要性について 名古屋柳城短期大学紀要, 33, 47-55.
- 丹羽智美・速水敏彦 2007 有能感のタイプと愛着スタイルの関連 日本心理学会第71回大会発表論文集, 62.
- 尾形和男・舟橋真緒 2016 夫婦関係が幼児期の父子関係イメージ・母子関係イメージ, 高校生の愛着スタイル, 対人関係に及ぼす影響 - 幼少期と高校時代についての大学生の回想から - 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 65, 75-84.
- 尾形和男・増南太志 2019 青年の自己有能感形成要因と大学生活 - 児童期のつらい出来事、しつけに対する親の関わりから - 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 19, 91-103.
- 尾形和男・増南太志 2021 青年の自己有能感形成に及ぼす要因について検討 - 両親の養育態度 (PBI) と自尊感情・他者軽視との関連 - 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 21, 107-114.
- Oppenheim, D., Koren-Karie, N., & Sagi, A. 2001 Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience: Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, 25, 6-26.
- 小塩真司 2005 研究事例で学SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析 東京図書.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol. 11, p. 326). Princeton, NJ: Princeton university press.
- 寺田香菜・岩淵千明 2008 親への愛着および愛着スタイルが自尊心に与える影響に関する研究 日本心理学会第72回大会発表論文集, 142.
- 酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係:内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究, 9 (2), 59-70.
- 島 義弘 2012 アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 21, 2, 176-182.
- 山田琴乃・藤井勉・上淵寿・利根川明子 2011 愛着の内的作業モデルと他者軽視、自尊心の関連 (2) 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1007.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 2002 Amosによる共分散構造分析と解析事例 (第2版) ナカニシヤ出版.
- 山本真理子・松井豊・山城由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 (1), 64-68.

